講演会 報告書

ふくしまの農と人と

つながる講演会

開催日：2018 年 1 月 20 日（土）

記録：　かながわ「福島応援」プロジェクト（kfop）
富士ゼロックス株式会社 端数倶楽部
作成：　かながわ「福島応援」プロジェクト（kfop）

2018 年 2 月 1 日発行　不許複製・禁無断転載

1. はじめに

2011 年 3 月に発生した東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故からまもなく 7 年になろうとし、第一原発から 20km 圏内の地域に出された避難指示も段階的に解除が進んでいますが、いまだ原発事故は収束したとは言えず、多くの課題が残っています。生活環境がまだ整っていない地域もあります。私たち福島県外に住む者も、関心を薄れさせることなく、福島について学ぶべきことはまだ多くあります。

かながわ「福島応援」プロジェクト（kfop）は、神奈川から福島におもむき現地の方々をお手伝いすること、経験を伝えることを柱として活動を続けており、また今後も長く福島にかかわり続けたいと考えています。

その活動のひとつとして、一般の方々にも現地の生の声をお聴きいただき、さらに関心と交流を深めていただけるように、講演会を年 1 回企画しています。今回は、富士ゼロックス株式会社 端数倶楽部のご協力を得て、共催にて開催しました。

併せて、この講演会の開催を通じて以下の効果を狙いました。

- 震災と原発事故の影響を受けた地域の現状を神奈川の方々に伝える
- 当事者から直接お話を聞くことで、共感し、より身近に感じていただくことを期待する
- 被災地とボランティアという関係にとどまらない、多様なかかわりかたのヒントを得る
- 新しい方々との情報交流も図り、持続的な福島の応援・発信につなげていく

2. 開催概要

(1) 日時・式次第

開催日時　2018 年 1 月 20 日（土）14:00～16:30

会場　八洲学園大学 7 階 7A 教室
神奈川県横浜市西区桜木町 7 丁目 42（JR 横浜駅東口より徒歩 10 分）

タイトル　「ふくしまの農と人とつながる講演会」
～福島でチャレンジする若手農業者のこれまでとこれから。
その自信と魅力はどのように生まれたのか。
困難のなかで見いだした、対話とつながり。～

登壇者　菅野瑞穂さん（きぼうのたねカンパニー株式会社 代表取締役）
廣野晶彦さん（あぶくまカットフラワーグループ、花卉栽培農家）

対象　一般市民（神奈川県在住者、ボランティア参加者等）

共催　かながわ「福島応援」プロジェクト（kfop）
富士ゼロックス株式会社 端数倶楽部

協力　認定 NPO 法人かながわ 311 ネットワーク
NPO 法人かながわ避難者と共にあゆむ会
かながわ災害ボランティアバスチーム
合同会社ふくわらい

協賛　azbil みつばち倶楽部

後援　神奈川県

その他
・きぼうのたねカンパニー、ふくわらいによる物販を会場内で開催
・講演会終了後に近隣の飲食店で講師を交えた懇親会を開催（17:00～19:30）
・鉄道の遅延により一部参加者に 10 分前後の遅参が発生

式次第

〔ご挨拶・活動紹介〕.....14:00～14:15
かながわ「福島応援」プロジェクト（kfop）代表 渡辺孝彦
富士ゼロックス株式会社 端数倶楽部　　災害タスクリーダー 森本 健
〔第 1 部〕.....14:15～14:55
福島復興の農業再生のモデルとなった東和地区の取り組みと
リピーターを生み地域に人を呼び込むツアーづくり
菅野瑞穂さん（きぼうのたねカンパニー株式会社 代表取締役）
〔休憩〕.....10 分（予定）
〔第 2 部〕.....15:05～15:45
地域の枠を越えた若手農業者の連携と　その先に見えるあぶくま地域の農業
菅野瑞穂さん（きぼうのたねカンパニー株式会社 代表取締役）
廣野晶彦さん（花卉栽培農家）
〔質疑応答〕.....15:45～16:05
〔閉会〕.....16:05～16;10
〔名刺交換〕.....16:10～16:30

(2) 参加者実績

講演会　53 人（うち一般 33 人、登壇者・スタッフ 20 人）
懇親会　28 人

(3) 登壇者略歴

◆菅野瑞穂さん

きぼうのたねカンパニー株式会社 代表取締役

福島県東和町（現：二本松市）生まれ。

東京での大学生活を経て、都市と地域をつなぐ農業を目指し二本松に U ターン。就農して 1 年後に東日本大震災に見舞われ、原発事故による放射能の被害と向き合うことになった。

福島第一原発事故による福島の農業の現状を伝えようと、2013 年 3 月「きぼうのたねカンパニー」を設立。旅行会社のスタディツアーや農業体験の受け入れもしている。

◆廣野晶彦さん

あぶくまカットフラワーグループ 花卉栽培農家

福島県川俣町山木屋生まれ。

東京で花卉の仕事を学び、福島で家業の花卉栽培を継ごうと考えていた矢先に震災が発生。山木屋地区の住民は避難を余儀なくされる。

2015 年 4 月から川俣町に戻り、町内の別の地区にある仮設住宅から車で 30 分かけて山木屋地区に通う。（山木屋地区は 2017 年 3 月 31 日に避難指示解除）

市場で高く評価される質の高い切り花の栽培に取り組む。

会場の様子

好評の物販コーナー

3. 講演の内容

(1) 第 1 部

第 1 部では、菅野瑞穂さんより、「福島の大地に希望のたねをまく」と題したスライドに沿ってご講演いただいた。

二本松市東和地区について。東和町を含む 3 つの町と 1 つの市が 2005 年に合併し二本松市となった。地区の人口は約 6,000 人。平らな土地は、棚田・水田、傾斜地は桑畑が広がっている。町の名前はなくなったが、東和の名を残そうと、30 年前に地区全体で有機農業に取り組み、牛ふんや食品残さを堆肥化するセンターを地区に設立するなど、循環型の有機農業を目指した。2011 年、震災後に「福島農業再生モデル地区」となる。除染、全品・全袋検査を実施。

菅野さんの実家は代々農家で、菅野さんで 8 代目。菅野さんは 2010 年に東和に戻って就農。大学時代の経験を通じ、農業は夢や可能性があると考え、農業という価値をビジネス化し、都市と地域をつなぐ、生産者と消費者をつなぐことを目指した。原発事故が起き、二本松で作付けができるかどうかの決定が出るまで悩み、それ以降も本当にここで農業をやっていいのかと悩んだ。

見えない放射線量をどう見える化するかが大事。新潟大学などの協力を得て、放射線量の計測、用水路の除染を進めた。耕すことで大地はよみがえることがわかった。2013 年以降、基準値を超えるものは検出されていない。

目に見えない分断はある。震災直後、二本松市の学校給食では県外産の米を使うようになった。また家庭でも、祖父母と孫の食事に使う材料が別ということも起きた（孫には安全なものを）。原発事故が奪ったもの。

2013 年、継続的な事業として福島の経験や想いを伝えるために「きぼうのたねカンパニー」を設立。理念は、「たねをまくことは、命をつなぐこと」、「人の心に希望の種をまき、未来の自分を想像する社会」。事業 1「人と自然をつなぐ体験プログラム」では、旅行会社 H.I.S.と連携し、5 年間で 7 回、米作りツアーを実施。2016 年には農家民宿遊雲の里をオープン。農業体験というツールを使っての教育。支援はキッカケでしかなく、支援を超えたお互いの学び、協働による新しい創造を目指している。事業 2 では、農産物のインターネット販売や主に福島県内でのマルシェで対面販売をしている。

福島のマイナスイメージの壁を乗り越えること。人に来てもらう、肌で感じてもらうこと。持続性と地域社会の自立。地域の人を最大限に生かすこと。就労の場、移住してくれること。子どもの姿が見られる、昔ながらの原風景を取り戻すこと。

自分の仕事を紹介するときには、農業の志事（しごと＝こころざすこと）と説明している。育てるのは、自然、人間、作物、地域、消費者、命。

菅野瑞穂さん

講演の様子

(2) 第 2 部

第 2 部では、廣野晶彦さんによる川俣町山木屋地区の現状やトルコキキョウ栽培についての講演に続き、菅野さんと廣野さんによるセッションという形を取った。

川俣町山木屋地区は二本松市東和地区と隣り合わせで、標高は山木屋のほうが高いが土地はなだらか。梅、桜、椿が同時期に咲く。原発事故の影響で空間放射線量が高かったため 2011 年 4 月に計画的避難指示区域に指定され、5 月に避難完了（その後、避難指示解除準備区域と居住制限区域に再編）。2017 年 3 月 31 日に避難指示が解除。山木屋地区の獅子舞が 7 年ぶりに再開された。

廣野さんは実家の家業であるトルコキキョウ栽培を継ぐため、2008 年から研修という形で東京の板橋にある花卉市場に勤めていた。予定では 2011 年に研修が終わることになっていたが川俣町に帰れず、そのまま勤務を続けた。2015 年に川俣町に戻り、山木屋地区で花卉栽培を始める。

あぶくまカットフラワーグループでは 2013 年にトルコキキョウの実証栽培を始め、2014 年にグループに属する 8 軒全部が出荷を再開。花卉は食べものではないため、震災直後を除けば風評被害はほとんどなく、逆に応援してくれる人も多かった。

大阪大学や広島大学フェニックスリーダー育成プログラムなどの協力で、研究者やボランティアなど地区外の人々との交流、勉強会もおこなった。

長いあいだ人が住んでいなかったため農地は荒れてしまい、使われていない田でも草刈りや水路掃除が必要だが、帰還したのは高齢者が多く、作業がままならない。地域住民で共同でやってきたことを今後どうするかが課題。

《セッション》

菅野さん（以下「S」）：戻っての感想は？

廣野さん（以下「H」）：若い世代がいないので将来的に不安はあるが、やるしかないという気持ち。地域のコミュニティを作る。ここ数年でなんとかいい方向にもっていく案がないか、と思案している。

S：山木屋でも今年、米の栽培を再開することについてどう感じている？

H：米の再開、食べるものを作ることは風評被害との戦いだと思っている。基準値を超えるものは出ていないという事実はある。米への放射性物質の移行については検査と研究でわかってきており、放射性物質は胚芽に吸着するため、精米すると危険な部分は取り除かれ、より安全になる。

S：お米の価格は補償されている？

H：補償はされていない。ほかの地区より若干安いくらいかなと予測している。風評被害は結局は値段の差。今までと違う差が出るというのが風評と考えている。

S：備蓄米や飼料米なら国の補助があるから作るという農家もいる。

S：山木屋地区や飯舘村では 2018 年 4 月から小中一貫校が再開するが、ちょうど昨日の報道では山木屋地区の学校に通う予定の子どもは 6 年生が 3 名、中 2 が 2 名、中 3 が 7 名、それより下の子どもはいない。

H：過疎化はここだけの問題でなく全国的な問題で、重要なことは将来を支える子どもがいないこと。子どもが戻るのは、環境の変化もあり大変なこと。子どもがいる世帯が戻らない事情もわかる。むしろ自分が思ったよりも多かったし、戻る決断をした人はすごい度胸だと思った。

S：子どもだけではなく大人も、周辺に人に住んでいるかどうかなどの状況も重要。

H：地域によってバラツキがあるが、山木屋 11 区のうち僕が住む区の住人は、全員帰ってきている。祖母の区は全員帰ってこない。人が帰ってきて頑張っているかどうか、などは大きく影響があると思う。

S：帰ることを迷っている人もいる。どの地域も若手が少ないなかで、たとえば南相馬の小高ワーカーズベースの和田さんは地域の課題から事業をつくることを目指している。浪江町のまち・なみ・まるしぇでお店を再開した女性のインタビューを見たが、自分の姿を見た誰かが次の動きにつなげてくれるとうれしいと話していた。一度避難してからまた戻る選択をするかどうか、まだ迷っている方もいるが、だんだん白黒はっきりしてくる、と廣野さんもおっしゃっていた。これから考えていることはあるか？

H：これからどうやって食べていくか、が一つの問題。家業を継ぐと決めて東京の市場に研修に行ったが、戻れなければ、やってきたことが無駄になってしまうと思った。そのままサラリーマンとして暮らすという方法もあったが、農業に対する魅力を感じ、戻って活動しようと決めた。天候などの影響なども多いが、自分が動けるうちは頑張っていきたいと思っている。

S：最近のツアーでも川俣町などをコースに加えた。今後、地域の課題を共有して地域を超えたつながりを持つことが課題と思っている。東和地区は避難しなかったが、山木屋地区は避難して戻られた経緯があり、今回このセッションを設けた。
住んでいる人だけの力ではどうしても限界があり、大学生が興味を持ってきてくれるなどの環

境の中でどのようなことをしようと思うか？

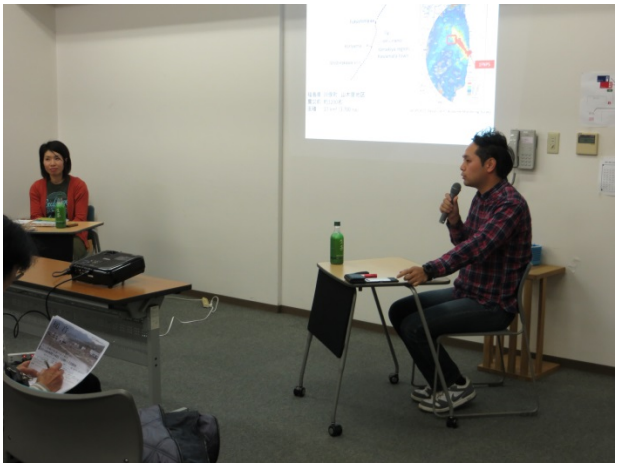
H：自分たちだけでなんとかしようとすると限界がある。地区を知ってもらう、自分たちが見えない視点で見てもらうというのが大事だと思う。そういうところからいろんなつながりができて発展していくのではないか。大阪大学の参加から新たなアイデアにつながったことなどもあるので、これからも積極的に地区外の方と交流する場を大切にしていきたい。

S：福島の浜・中・会津もそれぞれ違っていて、私自身、なかなか行く機会が持てないが、実際にそこに行って知るということをしていきたい。フレコンバッグが目の前に積まれている状況はどのような気持ちか。

H：フレコンバッグは見た目のイメージが悪い。しかし、置き場に設置されているモニタリングポストを見ると、実際には福島駅前よりも低い。イメージだけで判断しないで事実をしっかり調べて、知る機会を持っていただきたいと思う。

S：こういったことを話す機会が減っている。そこを少しでも振り向いてもらえる、つながりたいと思っていただける機会をいただいたことを感謝している。

廣野さん



菅野さんと廣野さんのセッション

質疑応答

懇親会

(3) 質疑応答

最後に質疑応答の時間を設けた。配布した質問用紙での質問は少なく、挙手での質問のほうが活発だった。

●フリーペーパーはどのように発行されているのか？

S：2017 年 3 月 11 日に発行した。福島の姿を広めていきたい。インタビューした声をそのまま載せていく。2018 年 3 月発行予定の号では、福島を離れた人の声を届けたい。

●東和地区は避難を免れたゆえの農業に対する苦しさもあったと推察する。そのような状況でも希望の種をまき続けてこられたコツは？

S：悔しいという思い。農業をやりたくてもできない人がいたり、住めない人がいたり、自分ではどうしようもないその悔しさから、その現状をきちんと伝えていきたいと思うからこそ活動ができる。出会いの数が増えてそういう方たちに支えられているというのが大きい。

●花の栽培は応援する人も多いとのことは喜ばしいが、帰還する若者が少ないなど課題も多いなかで、今後の希望や願いは？

H：放射能の事故があって、過疎化が一気に加速したという現実。今まで住んでいた人が離れて一気に人口が減ったことが、放射能事故の本質だと思う。除染で線量は低くなっている。同世代の人たちを増やしていかなければならない。大変な課題だがやっていかなければならない。
川俣町では避難しなかった他の地区との兼ね合いがあり、行政があまり積極的ではない。隣の飯館村や東和は力が入っていてうらやましいと思う。山木屋地区でも進めていかなければならない。

●無関心な方へ伝えたいことは？

H：無関心は仕方がない。危ないから買わないという人は、それはそれでいいのだけれど、放射能について正しい知識を持ってほしい。現在、キノコは食べてはいけないが、基準値を超えたら即影響が出るのではなく、基準値を超えても毎日大量に食べないと健康被害は出ないレベルであることを知らない人が多い。

●放射線について、線量計を現地に持参して測ることや、線量について話すことをどう感じるか？

H：個人的には、積極的に測って自分で確かめてほしい。

S：ツアーを受け入れているので、空間線量は伝えている。線量は変化していることを知らない人にも確認してもらう。来たからこそ感じられることとして数値を見てもらうことはいいと思う。

●：どういう人に戻ってきてほしいか？ どういう人なら戻ってやっていけるか？

S：地域の中に住み、仕事があるというのが大きな割合を占めると思うが、さらに地域活動への視点を持ってもらえるとうれしい。活動人口が増えると盛り上がるのと思うので、一緒に地域を盛り上げてくれる人。

H：農業で食べるのは思ったより大変で、県北では冬に野菜が生産できず自給自足もできない。生産、加工、販売、代金回収と、すべてやるので大変だが、田舎の大したことなさそうな人も実はそうしている。それができる人。人とかかわって溶け込める人。

別紙 1　広報用チラシ

ふくしまの農と人とつながる講演会

＋物販も！

2018.1.20(土)
14:00～16:30(13:30開場)

福島でチャレンジする若手農業者のこれまでとこれから。
その自信と魅力はどのように生まれたのか。
困難のなかで見いだした、対話とつながり。

〔第1部〕
福島復興の農業再生のモデルとなった東和地区の
取り組みと、リピーターを生み地域に人を呼び込む
ツアーづくり

〔第2部〕
地域の枠を越えた若手農業者の連携と
その先に見えるあぶくま地域の農業

会場：八洲学園大学 7階7A教室
神奈川県横浜市西区桜木町7-42

・横浜駅(東口)から徒歩10分
・横浜市営地下鉄「高島町」駅から徒歩1分
・横浜高速鉄道みなとみらい線「新高島」駅から徒歩5分
・京浜急行「戸部」駅から徒歩5分
裏面の地図をご参照ください

菅野瑞穂さん
きぼうのたねカンパニー株式会社
代表取締役

福島県東和町(現：二本松市)
生まれ。東京での大学生活を経て
都市と地域をつなぐ農業を目指し
二本松にUターン。就農して1年後に
東日本大震災に見舞われ、
原発事故による放射能の被害と
向き合うことになった。
福島第一原発事故による福島の
農業の現状を伝えようと、2013年3月
「きぼうのたねカンパニー」を
設立。旅行会社のスタディツアーや
農業体験の受け入れもしている。

廣野晶彦さん
あぶくまカットフラワーグループ
花卉栽培農家

福島県川俣町山木屋生まれ。
東京で花卉の仕事を学び、福島で
家業の花卉栽培を継ごうと考えていた
矢先に震災が発生。山木屋地区の
住民は避難を余儀なくされる。
2015年4月から川俣町に戻り、町内の
別の地区にある仮設住宅から車で
30分かけて山木屋地区に通う。
(山木屋地区は2017年3月31日に
避難指示解除)
市場で高く評価される質の高い切り花
の栽培に取り組む。

参加費：無料
定員　：50名
事前お申し込みの方を優先(裏面参照)

お申し込み方法：

Webの申し込みフォームから
https://goo.gl/9n51TC

Facebookイベントページで申し込み
https://goo.gl/fNezj7

または電子メールで
info.kfop@gmail.com
お名前、ご連絡先、懇親会の出欠、kfopからの今後の
メール配信への同意／不同意をお知らせください

共催：　かながわ「福島応援」プロジェクト(kfop)
　　富士ゼロックス株式会社端数倶楽部
協賛：　azbil みつばち倶楽部
後援：　神奈川県(申請中)
協力：　認定NPO法人かながわ311ネットワーク
　　NPO法人かながわ避難者と共にあゆむ会
　　かながわ災害ボランティアバスチーム

別紙２　　参加者アンケート用紙

講演会（2018年1月20日）に関するアンケート

本アンケートは、講師の方へのフィードバック、活動報告、今後の企画での参考のために実施します。
ご協力をお願いいたします。
なお、回答は統計として処理し、文章は個人を特定できない形に変更させていただく場合があります。
≪電子メールでも受け付けます。info.kfop@gmail.com まで件名:【アンケート】でお送りください≫

１．今回の講演会の情報をどこで知りましたか？　丸を付けてください。

a. 共催団体による告知
　a-1　かながわ「福島応援」プロジェクト（kfop）
　a-2　富士ゼロックス株式会社 端数倶楽部
b. 登壇者や協力団体による告知
　b-1　かながわ 311 ネットワーク
　b-2　かながわ避難者と共にあゆむ会
　b-3　かながわ災害ボランティアバスチーム
　b-4　合同会社ふくわらい
　b-5　その他（具体的に　　）
c. 友人・知人からの紹介
d. インターネット検索
e. その他（　　）

２．今回参加した理由は？（いくつでも）

a.　福島や被災地に関心があるから
b.　講演者に関心があるから
c.　講演のテーマに関心があるから
d.　日程や会場がよかったから
e.　その他（具体的に：　　）

３．今回の講演のテーマや進行はいかがでしたか？

a.　よかった　b. 普通　c. よくなかった
（どのような点が？　　）

４．今回の講演についてご感想・ご意見など、自由にお書きください。

（　　）

５．今後の講演会の企画に向けて、どのような方のお話を聞いてみたいですか？

（　　）

６．あなたご自身についてお答えください。（あてはまるものに〇をつけてください）

性別	男性　・　女性
年代	20 代　・　30 代　・　40 代　・　50 代　・　60 代　・　70 代以上
職業	会社員/会社役員　・　公務員　・　自営業　・　パート/アルバイト　・ 学生　・　専業主婦（主夫）　・　その他　・　働いていない

別紙３　参加者アンケート集計結果

参加者数	53
回答数	31　（58%）

１．今回の講演会の情報をどこで知りましたか？

※重複回答は重複先にカウント

a. 共催団体による告知		
a-1　かながわ「福島応援」プロジェクト（kfop）	18	
a-2　端数倶楽部	3	
b. 登壇者や協力団体による告知		
b-1　かながわ 311 ネットワーク	4	
b-2　かながわ避難者と共にあゆむ会	1	
b-3　かながわ災害ボランティアバスチーム	1	
b-4　ふくわらい	2	
b-5　その他（Facebook）	1	
c. 友人・知人からの紹介	6	
菅野さんと Facebook で友人。HIS ツアーに参加。	1	※
d. インターネット検索	1	
e. その他		
FB で菅野さんより招待をいただきました	1	
きぼうのたねカンパニーの FB ページ	1	

２．今回参加した理由は？（いくつでも）

a.　福島や被災地に関心があるから	29
b.　講演者に関心があるから	5
c.　講演のテーマに関心があるから	16
d.　日程や会場がよかったから	6
e.　その他	2
・菅野さん、廣野さんに 4 か月ぶりにお会いしたかった	
・菅野さんより招待をいただいたから	
・テーマ　農と人のつながりを知りたかった	
・福島出身の友人がたくさんいます	
・消費地　横浜の人にとって福島・原発・農業は どう見えているのか？	

3． 今回の講演のテーマや進行はいかがでしたか？

a. よかった	28
b. 普通	3
c. よくなかった	0

（コメント欄）

- 東和、山木屋地区の現状を知ることができた
- 震災～現状までの取り組み状態を知ることができた
- お手伝いしたくて早めに参加しました
- 住むことと生活すること
- 東和、山木屋についてお話を伺うのは初めてでした。浜通り地区でも多くの方が頑張っていると聞いています。まだまだ大変なことも多いと思いますが、頑張ってほしいです。
- 農業の観点を中心に、従事者の本音を聞かせていただき有意義でした。
- 事実を知る機会になった
- 志事の考え方が自分の生き方にも参考になった。共育の場を体験したいと感じた。
- 生の話を聞けて良かった
- やる気のある若手の農業者、園芸家の話が聞ける機会を得て大変良かった
- 今の福島を知ることができた！
- 大変良かったです
- 移住や若手の情報発信の大事さが理解できた
- 山木屋町というのは初めて聞いた場所でよかった
- 支援から協同へ
- 現地で頑張っている若い人の声をきくことができた
- わかりやすい

4． 今回の講演についてご感想・ご意見など、自由にお書きください。

- 復興だけでなく将来を託すためにも若い人の力が必要であることがよくわかりました。移住者が出るといいですね！
- 福島で不安を抱えつつも可能性を感じながら新しい取り組みをされていることが分かった
- 無関心や知らないことの多さを改めて感じました。もっと身近な人を巻き込んで自分たちに何ができるかを考えていきたいと思いました。豊かな自然とおいしい食べ物と優しい心の福島、大切なことを忘れていた気がします。
- 食に対する風評は敏感であることを捉え、知ることは生きることをテーマに見えない放射

能を見える化した！！

- 現状を知ることは第一歩と感じました。離れていてもできること、小さくても続ける意味を認識しながら、細々ではありますが、これからも福島始め東北被災地を応援し続けます。他人事で終わらせてはいけない、常にジブンゴトとして考えつづけたい意向です。精神的にも充足した復興を必ず待っています。
- なかなか聞けない本音を聞くことができよかった。今後も継続して事業発信してほしい
- 生の話を聞けてよかった。今後どうやって盛り上げていくのか、難しいですね。
- くやしさ→原動力、人との出会い、売る→収入を得ることは大変なこと
- 東和地区の人の移住や若者の農家のフリーペーパー大変興味深いものでした。
- ここから「食べていく」のに必要なのが何なのか、考えながら来ていました。勉強にもなりましたし、共感しました。まずは民宿に遊びに行きたいです。
- 生の声を実際考えながら進めている方から聞けて良かった。多数おいでの高齢者の方のお考えも聞けるとよい。
- 次第に風化していく震災、かなりの避難が解除されてきているが、帰還が進まない状況の中で実態に少しでも近づけた気がします。やはり聞いてみないと今の状況はわからないと感じました。今後少しでもご協力していきたいと思います。出身地も原発を抱えていてとても人ごととは思えないので何らかの形でかかわっていきたいと思います。
- 東和、山木屋へ行ってみたいと思いました。都市に住む私たちは農家に育てていただいているという思いを一層強くしました。適切な方法で育てた農作物を食べ、放射能の問題ときちんと向き合うことは自分の生活にかかわることです。
- 講演会のセッティングをありがとうございました。このような内容を広めていけるといいのですが。。。
- 震災、事故という大きなことがありましたが、廣野さんが日本各地で起きている問題と同じ視点で話をされていたのでわかりやすかったです。
- 若い世代の方が地元で農業を続けているお話を聞けて課題はたくさんある中でやりがいを感じながら頑張っていることに感動しました。課題を解決していくことは大変だと思いますが、つながりに感謝しながら活動をされていらっしゃるので、同じ方向に向かっていく仲間を頑張っていってほしいと思いました。
- 日々生活をし、生産している人の言葉は力強さを感じた
- みずほさんの取り組みに関心があったのでよかったです。廣野さんのぼくとつとしているのに笑えるところがよかったです
- 現状を知ることがとても貴重で大事なことだと思います。
- 福島の話を聞ける場が少なくなっている、という菅野さんの言葉が印象的でした。
- 経験したことをリアルに発表できる若人がいることに感動しました！！

6． 今後の講演会の企画に向けて、どのような方のお話を聞いてみたいですか？

- 案①石崎芳行様（東電福島復興本社・福島担当特別顧問）
  案②齊藤実様（博士（理学）、NPO 法人南相馬サイエンスラボ理事長）
- 成功例の水平展開であれば参加したい
- 福島とかかわってきた kfop の皆さんの活動を通じての感想もお聞きしたい
- 農業中心ということで基本と思いましたが、生活（大変広いですが）やコミュニティの課題と実情についても聞けたらと思います
- 漁師の方や流通にかかわっている方
- ボランティアに行っている人
- これからも現地の方の話を聞く機会を願っています

7． あなたご自身についてお答えください。

性別

男性	15
女性	16

年代

20 代	0
30 代	3
40 代	3
50 代	7
60 代	13
70 代以上	5

職業

会社員/会社役員	10
公務員	1
自営業	5
パート/アルバイト	2
学生	0
専業主婦（主夫）	2
その他	4
働いていない	6
無回答	1

※自由記述については原則としてご記入いただいたまま掲載していますが、明らかに誤字脱字と思われる記述は修正させていただきました。